

芥川だより

発行日 * 2025年11月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

えっ、また緊急入院！



3ヶ月に一度の検診、採血をして、たまにするエコー検査を終え診察を受ける。担当医から「心臓に水がパンパンに溜まっています」「えっ…」「手術しないとヤバイです」「すぐですか」「そうです、循環器の先生に見てもらったら今日3時から空いているのでやるそうです」「緊急入院ですか」有無を言わず私は手術台に乘せられる。「あのう、車を駐車場に止めたままなんです」「第二なら大丈夫」。

短い医師とのやり取りが終わると看護師が付き添い、手早く入院手続きを行い病室に行き点滴が始まる。こうなればあれやこれやと思いは頭をよぎるのだが、何ともしがたい。流れに身を任す以外にすべはない。独り暮らしが始まったばかりで、誘拐のように突然外部との連絡が取れなくなった。

院内に8つある手術台の一つに座り幾人もの医師や看護師に取り囲まれた。あまり手慣れた様子には見えないが局部麻酔の注射が打たれた。これまでの経験では、酒を飲んでいるから麻酔の効きは悪いはずと思いながら、医師らの会話を聞く。心臓のエコーを見ながら管を入れる場所を探している。臓器や膜を傷つけないように水の溜まりぐあいのいいところを皆で検討している。ベテランと思える人が後ろから若い執刀医に小声と指図で指示を送り出して手術は始まった。細い管なのでさほど痛さは感じない。50 cc位のボトルに13本、650 ccの水を抜いて手術は無事に終わった。1時間程だった、これまで受けた手術の中では最も痛みもなく簡単であった。

2泊3日と最初に聞いたので、軽く考えていたのだが実際は13日も入院する事になった。私は、どんな病気でも病気の事を考えないようにしているのだが、今回は不思議だらけで、あれやこれやと考えざるを得なかった。スマホでいろいろと検索し病気の原因や今後の養生など調べたのだが、よくわからない。AIに聞くと、10万人に一人とか出てくる稀な病気なのだ。

私は、筋炎など稀な病気に縁がある。症例が少ない病であっても運よくこれまで生きてこられた。私以上に担当医は、心配りをして私の病状を心配してくれて治療していただいたおかげである。誠にありがたい。

死をめぐるあれやこれ (130)

新首相と「積極財政」

石川 吾郎

自民党の総裁選挙のテレビ報道は、ひどいものだった。というのもニュース番組がその話題に塗りつぶされた感があつたからだ。最大の党といえどもただの一つの党内の選挙をこれほどの時間を割いて報道する意義は何だろうか。結局、自民党がタダで大宣伝をすることができたという事に尽きる。首相就任後の高市氏の支持率が驚くほど高かったのは、このNHKをはじめとするTV各局のタダのキャンペーンの「成果」だということができるだろう。◆積極財政をうたう新内閣が、本当に生活に困窮する国民のために減税や格差を縮小するような支援策を実行していくのか、厳しく見ていかなければならぬ。高市氏は六月の骨太の方針にプライマリーバランス黒字化目標を入れないと国会で明言した。確かに一歩前進と言えるかもしれない。というのもこれは毎年の政府支出を税収以下に限定せよ、とするものだからだ。我が国の三十年の経済停滞は、複数年にわたるプロジェクトを不可能にするこの自縛自縛が大きく影響していたとも言われる。だがこの積極財政が国民の生活向上のために使われるかどうかは、まだわからない。◆就任早々にトランプと会談をして某氏の表現によれば「奴隸的外交」を展開し、「防衛装備品」という武器の爆

買いを約束したらしい。積極財政がまさにこのことだとしたら、「戦前化」が加速しないか、国民はよく警戒し監視しなければいけない。

素老人☆よもだ帳（140）

坂本一光

◆時事放論二題

（1）総裁の顔だけ変わり同じ党

自民党の新総裁が決まった。自公合わしても過半数割れの国会でこの新総裁がすんなりと首班指名されるかどうかは現時点で微妙な雰囲気もあるが、このまま新総理となると小題は次のように変わる。

政権の顔だけ変わり同じ国

総裁選をめぐってテレビや新聞のマスコミは新しい総裁に誰がふさわしいと思うかと世論調査を行った。高市氏〇〇%、小泉氏△△%などの人気投票に加え、候補者の一挙手一投足、一言一句を取り上げて毎度のことながら異常な報道をくりかえした。その中で一つだけハツとした時があった。それは、誰が総裁にふさわしいかの第一位の回答が、実は「わからない」だったという報道を見た時である。わからない、わからない、わからない……とつぶやきながら、ああそうかとハタと膝を打った。

「わからない」とは「かわらない」！
ということでもあったのだ。

国民は黙っていても知っている

国民は実によく本質を見ている。

地方新聞のコラムニストも黙ってはいない。以下この間の動きを、大分合同新聞「東西南北」のコラムを見ながら追ってみた。

中国の故事にある（笑う者は測るべからざるなり）。いつも笑顔の人は真意が分からず恐ろしい、という意である。▼自民党初の女性総裁になった高市早苗氏（64）は、言葉を述べる際に「作り笑い」をよく挟む。相好を崩した次の瞬間に険しい顔に戻り、かと思えば口角を再び上げる。私は穏やかですよ、と周りに伝える彼女なりのスベ（計算）なのだろう▼その表情が「はなはだししい」と笑うのはフリーアナウンサーの古舘伊知郎さん（70）だ。「5秒に1回の作り笑顔ーあんなに笑わなくてもいいでしょ」。自身の動画番組でチクツと刺している▼コップの中の競い合いが終わった。12日間に及んだ総裁選の何と空虚だったことか。自民が正面から論じ合うべきは信頼回復だったはずなのに、病原の「政治とカネ」については5候補ともしれつとスルーした。案の定、コップの中身は炭酸が抜けて生ぬるかった▼この国のジェンダーフリーを象徴する新リーダーである。高市氏への期待は大きい半面、タカ派的な姿勢や排他的風潮をあおりかねない発言など不安要素も多い。作り笑いは通用しないだろう▼ふがいない野党は首相一本化の協議が不調に終わり、その敵失で日本

初の女性「総理」がやがて誕生する。スマイルの向こうにある本当の顔は……はかるべからざるなり。

（2）私も平和賞が欲しい

あれはいづだったか。二〇〇〇年の秋頃、いやな仕事が終わって2週間ほど韓国の大学に研修に行ったことがあった。大学院生の時代を同期で過した教授の研究室が受け入れ先だった。

構内に小さな池があり、そこに朝鮮半島を模した中洲がつくられていた。その意味を問うと彼は「ツワン」と言った。

ああ、統一か、二つの国が一つになる願いの象徴であった。しかしその時、私はツワンを two one と誤解していた。統一とは to one であった。「2が1に、じゃないです。1になる意味です」と彼は日本語で言った。それはそれとして、to one

Ⅱ統一、英語も漢字も同じ音に読めると妙に感心した。韓国の大統領が朝鮮労働党総書記・金正日と南北首脳会談を行ったのは半年ほど前の事で、私がそれを話題にすると彼は淡々として言ったものである。

「ああ。あれはノーベル平和賞が欲しいだけの事です」

受賞の報を聞いたのはそのすぐ後だった。半島とはいえ大陸に生きる人の冷静さ、あるいは強かさを感じた。

今また、同じようなことが世界で進行しているのかもしれない。一時の平和が

芥川だより二二六号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム130	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 140	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 89	祖蔵哲	4
ボケ老人の雑話 20	明石幸次郎	5
オクラの山たより 110	因了生	6
隠された歴史 85	満田正賢	9
俳句	影山武司	11
編集後記	SK生	11
ふみの道草 89	山椒魚	12

「実現」したとして、

何事も無かったように停戦か

コラムニストも言う。

He takes too many liberties.

「彼はとても多くの自由を手にする」と訳せそうだが、そうではない。「彼はずうずうしい」という意である。▼英単語を見つめれば言わんとすることが分かる。「自由」な振る舞いには人として思慮が必要だ。それが過ぎると無遠慮になり、傍若無人な態度に陥る―そんなイマシメを込めているのだろう▼冒頭の主語はトランプ大統領に置き換えてよい。10日発表のノーベル平和賞に自身が選ばれなければ「米国への大きな侮辱だ」と演説でおっしゃったそう。ただけずうずうしいのかしら。面の皮の厚さを測らせてほしい▼インドとパキスタンの武力衝突を停戦仲介するなど「七つの戦争を終わらせた」のが自薦理由らしい。推薦を要求され、外交戦略で応じた国もある。まさか日本も尻尾をフリフリ、お手をしておるまいな▼世界が失笑する中、ロイター通信は「ノルウェー・ノーベル賞委員会が重視する国際秩序を、トランプ氏はむしろ破壊している。受賞はない」と鼻で笑っている。まっとうだ、と言うのもアホらしい▼賞をくれ、と駄駄をこねる氏に「恥ずかしいので、おやめなさい」と忠言する人はいない。それは喜劇

か悲劇か。Heが選から漏れた時、世界の皆で委員会に平和賞を贈ろう。

しばらくはどちらの話題からも目が離せそうにない。そう思っていたが、動きは直ぐにあった。その一つ。

ノルウェーのノーベル委員会は十月十日、二〇二五年のノーベル平和賞を、ベネズエラの反体制活動家・野党指導者のマリア・コリナ・マチャド元国会議員に授与すると発表した。マドウロ大統領の独裁下で民主化を求める活動が評価された。それを受けた米国ホワイトハウスの「批判」が面白い。ステイブン・チャン広報部長は言う。今回の決定で、「ノーベル委員会は平和より政治を優先していることを示した」。また同氏はSNSに投稿、「トランプ大統領は今後も和平協定を締結させ、紛争を終わらせ、人命を救い続ける。彼は人道的な心を持っており、彼のように強い意志で山を動かせる人はいないだろう」と。立場が代われれば、何ともメデタイことが当たり前のことになるのだ。

同じ日、公明党が長年連れ添った自民党にサヨナラを告げ、連立政権を離脱した。先の地方新聞コラムニストはまたまた、黙ってはいない。

〈さよならは別れの言葉じゃなくて再び逢うまでの遠い約束なのだろうか。薬師丸ひろ子はヒット曲『セーラー服と

機関銃』で歌う。〈夢のいた場所に未練残しても心寒いだけさ。各党のあちこちで「カ・イ・カ・ン」との声が漏れていそうだ▼井上陽水も悲恋の切ない心情を『いつそセレナーデ』に込めている。〈あ

まい口づけ 遠い想い出 夢のあいだに浮かべて泣こうか〉。後ろ髪を引かれた人もいるだろう▼公明党が長年連れ添った自民党にサヨナラを告げた。右足でアクセルを強く踏み込もうとしている高市さんの助手席には乗れないらしい。シートベルトをするまでもなく、新車をさけた。▼一九九九年十月の小渕内閣から続いた自公連立である。政権交代で下野した時も一緒に冷や飯を食べてきた。選挙のたび「わが友党」と公明を持ち上げ、組織票の恩恵にあずかって来た〇〇県選出の自民党国会議員だ。首筋がヒヤリとしている方もいよう▼自民同様、公明も夏の参院選で大敗した。主因に挙げた相手の「政治とカネ」問題は譲れぬ一線だったとはいえ、自立できるのか。どちらも引くに引けず、握った手を離れた▼冒頭の昭和歌謡にならえば、自公のお二方にはぜひ、大沢誉志幸の代表ソングをデュエットしてほしい。曲は『そして僕は途方に暮れる』。

単独過半数の政党がなく、群雄割拠と言えほど粒ぞろいの党ではないが「一家言」を有する多党分立の時代に、どんな政権が誕生するか。それに向かって政

治を志した議員たちの見識がどんなものか。日本の政治の水準が頭になるだろうという興味は尽きない。

これは参った。首班指名をめぐる政治の迷走はまだまだこれで終わったのではなかった。どんでん返しとまではいわないが、ああ、やはりそうなのね、が始まった。コラムニストも忙しいことだ。

昔むかし、強さを自負する敵軍が現れた。大勢で威勢もいい。でも待てよ、よく見ればカラスのように群れて騒いでいるだけではないか。側近は將軍に進言した。「あれなら簡単に倒せます」▼鳥合の衆の由来である。規律がなければ統率もなく、ただ集まっているだけの雑多な組織やシマリのない集団を意味する。言葉は約1600年前の中国で生まれた▼政界でラブコールが乱れ飛んでいる。打てば一発大逆転の絶好機に、その球を振るべきか見逃すべきか。野党たちは政権奪取の利と害をケンケンゴウゴウ論じ合っている。鳥合の衆以外の何ものでもない▼「責」の字に、ひるんでいるようにも見える。「首相の座をあげる」と節操もなく語る党があれば、「総理大臣になる覚悟はある」と政治家なら当然のことを臆面もなく口にする方もいる。スもつくれん……と思っていたら、日本維新の会は寝返りを打った▼一方、「総裁にはなったが、首相にはなれないかもしれない女と言われている、かわいいそうな高市早苗で

す」と自虐ギャグがさえない自民党の新リーダーだ。身内の「傷物」 発言を含めて何かと少々お口が軽過ぎる。周りを笑わせている状況ではない▼一寸先は闇である。魑魅魍魎のプロボーズ大作戦が展開される中、大志のない腹黒のクラスたちが永田町でカアカア騒いでいる。

その二日後のコラム。

モテ期は人生で何回ある？ 恋愛支援サイトが成人男女400人に聞いたネットアンケートによれば「2回」が最多だったそうだが▼モテ期とはその語句が示す通り、異性なら「好意を持たれる旬の時期」。到来年代の設問もあり、2位は青春期の高校・大学生で1位は20代だった▼ちなみに40代以上は皆無であった。

にもかかわらず、56歳にしてチャホヤされた国民民主党の玉木雄一郎代表である。「一緒にあって」と多方面から告白され、鼻の下はだらんと伸びていた（ように見えた）。先週半ばまでは▼そういえば1年ほど前、週刊誌のスキヤンダル報道で役職停止となり、しばし謹慎しておられた。それが政権再編の波間を泳いでアレヨアレヨと時の人になり、数日前まで「次期首相候補」だったお方だ。華麗なる火消しの極意を、前橋市長は知りたかろう▼結局、清水の舞台から飛び降りることをためらった。煮え切らずに舞台の下を恐る恐るのぞいていたら、自分に向いていたスポットライトは突如、日本維

新の会を照らし始めた。気付いた時は蚊帳の外である▼言い訳はあろうが、首相就任のビッグチャンスはそうそうない。今ごろモテ期を逸したことに歯ざりしていよう。強弁の玉木氏を見るたび、つい『しらせ島首領』が口をつく。（みじめ、みじめ）。

強そうだった自民の終わりはすでに始まっている。その点でも似た者同士の維新が加わることで、両者の終わりは加速されるだろうか。逆に、それは成らぬとなりふり構わぬ悪政が反動的に加速され、国の政治は破滅に向かうだろうか。目が離せない。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

「哲学命い」の時事放談（89）

祖蔵 哲

AIの政治哲学

ウクライナ、ガザでの停戦も進捗せず、国内では熊が都市に出没し被害が多発するなど、今号も明るいニュースは少ない。ノーベル医学賞と化学賞に2人の日本人

が受賞したのみといってもよい。しかし、最近の日本の大学での基礎研究での予算は削減されている。今後の見通しは暗い。そのような状況を反映してか、高市政権が10月21日に誕生した。女性初とされ、今のところ支持率が高いが、その極端な保守主義から先行きは不透明である。10日には長きに渡り連立を組んでいた公明党が離脱を発表している。

新政権誕生の前にギリギリで石破首相が戦後80年談話を発表し、「戦争に発展した理由」について語った。自民党には珍しく歴史的事実を全面に出した「客観的」内容であった。歴史修正主義やフェイクがまかり通る時代にあつては新鮮さを感じさせる。

さて、新政権が誕生して一週間後26日、高市新首相はASEAN会議のために韓国に出発したが、トランプ大統領が無理に来日し強引な天皇会談を行ったため急遽日本に戻らなくてはならなくなった。大統領は終始上機嫌でトランプ劇場のスターを演じていたが、その隣では同じよう浮かれた高市が不自然な演技の作り笑いで付き添っていた。まだまだ演技経験不足だ。しかし、これから慣れてくるのである。何せポピュリストである。大衆の人気をつかむ天性の技を持っているはず。そして韓国での再び会議に戻った高市首相、いよいよ31日に中国の習近平主席と会談した。でもまだ固い表情だった。しかし、目まぐるしい初外交を終

えて帰国すると表情が和らぎ、その影響かどうか支持率が上昇していた。まさにポピュリストの本領発揮であろう。さて、現在、世界で広まっているポピュリズム。それはどのようなものか改めて整理してみよう。

（1）ポピュリズム

日本において、ポピュリズムは「大衆迎合」と訳される。大衆迎合とは、一般大衆受けする政策を訴えることで支持を集める手法で、衆愚政治や扇動政治と似た意味合いで用いられることもあるため否定的意味取られることが多い。しかし本来の発祥は19世紀末アメリカで人民党（ポピュリズム党）が結成されたのが機である。資本主義の矛盾が出てきた時代であり「人民対エリート」という二項対立を軸に政治闘争が展開された。その時のポピュリズム党の立場が「反エリート」であり、これが「エリート＝知性」ということで「反知性主義」になった。つまり、「知性や理性」による統治ではなく、「感情」による政治思考への転換を求めたのである。一方で「人民」の方はいえ、ロシアやソ連での「共産主義」が私有財産を否定したため、そちらの方が「階級的人民」に向かわず「大衆」という多数を求めた。そしてその「大衆」である「我々」はイデオロギーで団結するのではなく、彼らの古き良き伝統の中に帰帰するというところに団結したのであ

る。エリートが「進歩主義」であつたから彼らは「復古主義」を目指した。ここにポピュリストが「保守主義」になり、「反多様性」になった要因がある。本来の民主主義はこれらの違いを乗り越えて統合していく政治システムであるはずであるが、ポピュリズムは生まれながらにこの政治制度の根本原理を問う直す政治倫理思想なのである。

しかし、「大衆」主導といっても現在の民主主義制度は間接政治、どうしても代表者が統治をおこないそれに国民が従うということになる。ここで「煽動政治」が行われる危険が生まれる。ナチズムはその例である。政治は権威主義になり、それに大衆は文字通り「愚か」になり、それが「衆愚政治」となり国が破綻するのである。

それでは、このような「感情」による政治ではなく「知性や理性」に優れた者が政治を担えばよいのか。「知性」といえば人間を越えるその能力をもっているのが人工知能AIである。驚くべきことに、実際にAIを政治関係として登用した国が登場しているのである。

(2) アルバニアのAI大臣

今年9月、アルバニア政府は世界で初めて人工知能を「公共調達大臣」として任命した。その名も「ディエラ」、太陽を意味するらしい。

アルバニアはEU入りを目指しており、

その過程で特に「公共調達の透明性」と「汚職対策」が重要な課題とされている。汚職が多発する公共調達プロセスにAIを導入し、自動化・監視・透明化を進めることは、EU基準への適合をアピールする狙いがある。人間の裁量や癒着を減らし、汚職根絶を加速できるとの期待。国際的には「デジタル先進国」としてのイメージ向上も狙っている。

(3) AIは「哲人」になれるのか

古代ギリシャ、アテネでは民主主義政治が形骸化し、ポピュリズムの政治が行われ国が滅びゆく時代を迎えた。その時代哲学者プラトンは、「哲人」という知性的な洞察力和知恵を持つ者が国家の最高指導者となる理想的な統治形態「優秀者支配制」が、国家を正しい状態に保つと考えた。プラトンは人間の魂を国家になぞらえ、魂を良くするものが国家を統治すべきと考えた。人間の魂を「理性、気概、欲望」に三分割し、「理性」には国家の指導者「哲人」、「気概」には政治行政、「欲望」には大衆を割り当てた。そこで「理性」だけならAIでも「哲人」になれるのではと、考えたくなる。

(4) AI大統領の問題点

「理性」とは、感情に走らず、「知識」に基づいて考えたり判断したりする能力であると辞書は言う。感情がないとされ、知識の量も十分なAIは「理性的」と言

えそうだ。AIは時間的にも空間的にもあらゆる事を知っている。しかし、「知識」とは「知っている」ということだけではない。「AはBである。」というのは「命題知」のことである。必要なもう一つは「出来る」という「技術知」である。すなわち「言うは易く行うは難し」である。AIは「知っているだけ」であるが、その「知識」に基づいて「判断」することは得意とされている。しかし、この「判断」も問題点が多い。判断には様々な分野がある。「価値判断」「公平性判断」「倫理的判断」などである。例えば「分配」だけをとってみても「量」を優先するのか「質」を取るのか、答えは一つに定まらない。さらにそれぞれの判断には「バイアス」(偏見)が入り込む余地がある。特に現在のAIはまだ思考アルゴリズムは外部から与えられるものであるからそこに偏りの余地は残る。

さらにAI大統領の問題は「責任」である。そもそも「責任」とは「自由意志」を持つものが課せられるものである。「自由意志」とは自分自身の「意志」で行動を選択できる能力のことである。実際の人間犯罪でも心神耗弱状態では情状酌量される場合がある。つまり、自らの判断に基づいて行為を決定できない状態であれば責任を回避されるのである。果たしAIには「自由意志」があるかどうかという問題である。「自由意志」は「心」と解釈される場合もある。「AIは心を持つ

のか」という問題に帰着する。

このように今の技術レベルのAIではどうもまだ「哲人」にはなれそうもない。ただし、現在のアメリカ大統領トランプ程度では十分なレベルに到達している。いや、もうすでにトランプはAIなのかもしれない。彼は一見、知性がなく感情的にみえるが、それはAIがそのように見せているのであろう。AIを人間と判断するかどうかは「欲望」にかられた「大衆」がすることである。

ボケ老人の雑記(その20)

明石 幸次郎

仏教が説く幸せになれる四つの教えがあり、誰にでもできる四つの菩薩の行為、それを四摂事(ししやうじ)と言われている。菩薩の精神は人を幸せにしない限り、自分の幸せは得られないというものです。

それは、①布施(ふせ) 物質的、精神的に得たものを独り占めしないで、分かち合うこと。困っている人をサポートする。

②愛語(あいご) 優しい言葉、心に訴える愛情のこもった言葉をかけること

③利行（りぎょう）見返りを求めずに、人の為になることをする。

④同事（どうじ）相手の立場に立つて、物事を行うこと。同じ目線に立つて考えて、平等に接する。

四摂事の摂という字は「全てをとる」という意味を表し、四つの行為を合わせて行うことで菩薩の道を歩むことが出来ると言われています。

さて、先日、自国ファーストの剥き出しの国際政治での強い国家を目指す、アメリカのトランプ大統領が日本に来て、かつて仏教の教え（四摂事も含む）を基に国を治めた聖徳太子のお膝元出身の新首相になったばかりの高市さんがどう対応し、自国の利益を守る外交交渉を行うかで注目を集めました。さすが、仏教のふるさとの奈良出身だけあり、布施はたつぷりの5500億ドル（約85兆円）

のアメリカへの投資、関税15%で、投資はアメリカが主導権を取り、利益も9割がアメリカが取ると言われて、まさに布施の真逆のやり方です。この投資に手を上げアメリカ大使館に呼ばれて投資契約にサインした日本の大企業が、アメリカで利益を上げ、それをほぼアメリカに吸い取らずに自国と自社の利益を守り、従業員を守りえるか、これからが政治、外交、会社経営のデイルの見せどころではあります。

それと、高市首相はトランプ大統領に女性初の首相としては、上手く演技して

愛語らしき言葉は発したと思われます。

また日本への見返りを求めず、アメリカの為になるような利行は行ったか？トランプばかりを喜ばして、それで、トランプからの支持を得て、これからの政権権力を維持しようと野望を抱いたのではないか？

イギリスBBCのハрил東京特派員によるとトランプ氏が高市氏にとりわけ好意的な姿勢を示したと指摘し、大統領は「あなたに伝えておきたい。質問、疑問、欲しいもの、頼み事、日本の為に出来ることがあれば何でも、私たちはあなたの役に立つ」と述べたと伝えています。ハрил特派員はさらに日本政府関係者の話として、高市首相がトランプ大統領に、ノーベル平和賞に推薦する予定だと伝えるつもりだと伝えています。

今までの国際貿易の秩序とルールを無視して自国ファーストを掲げ、茶ぶ台返しをして、不動産の上りで財を成し、色々は罪を権力と財力でもみ消し、悪知恵のデイルでのし上がったトランプ氏が高市氏に愛語を発し、真の利行を行うとはとても思われませんが。

トランプ氏は数々の浮名を流した本来の意味の“ひとたらし”で有名？です。自分の為、自分の支持者の為の“愛語”は発するが、真の意味の“愛語”は発しないと私は思います。

これから益々難しくなる国際関係の中で日本と日本人を守り、安定し平和な国

にするため、荒波の国際社会で舵をきる船長の任を託された高市さんです。是非トランプの軽い言葉に迷わされずに、冷徹さと、したたかさ、それに情に流されない知恵を発揮して、安倍政治からの脱却と進化を見せるような政治を行なえるか。私は、高市さんに女性聖徳太子？と呼ばれる政治を行い、世界平和に貢献し、ノーベル平和賞を貰えるような野望を持った政治家になってほしいものですか。そこまでは望んでいませんが、今よりも少しでも、幸せが感じられる国民が増えるような、政治を実行して欲しいと、ボケ老人は望んでいます。

オクラの山たより（110）

困了生

一

一八九四（明治二十七年）年、一葉は前年十二月に「琴の音」を、そして、この年の二月には「花ごもり」をそれぞれ「文学界」に発表しています。この二作品は一葉の作家として分岐点となる作品でした。作家としての大きな変容を見せたこの時期、樋口家はかなりの貧苦にあえい

でいました。「琴の音」の原稿料はわずかに一円五十銭。これでは生活費の足しにはなりません。日々の生活費をどうするのか。たださえ頭痛と肩こりに苦しんだ一葉をいよいよ追い詰めます。

それともう一つ一葉の心にかかる黒い影がありました。それは萩の舎をめぐる出来事でした。

明治二十七年二月二日、一葉は龍泉寺に居を移して以来すっかりご無沙汰であった萩の舎をひさしぷりに訪れていました。そこで中島歌子から田辺花圃が歌塾を開くという話を聞きます。そして、一葉にも歌塾を開くことを「いかで世に名を出し給はずや」と強くすすめました。しかし、一葉にはそのための費用を用意することなどはとても無理で、彼女はこれを断り萩の舎を出ました。それ以上のことは日記にはかれていません。しかし、かつてのライバルであった花圃が歌塾を開くと聞いては、一葉の胸のうちは穏やかではなかったでしょう。

二月二十五日には平田禿木がやってきて、「女学雑誌」に同門の田辺花圃（本名は田辺龍子 貴族院議員の娘）と鳥尾ひろ子（貴族院議員の娘）の二人が師の中島歌子の勧めで力を合わせて歌塾を開くという記事のあることを伝えます。その日の日記に一葉は「万感むねにせまりて、ねぶること難し」と記しています。

こうした一葉の思いは、その二日後に同門の田中みの子を訪ねた日の日記で爆

発します。この日、一葉は田中みの子と伊東夏子の母のぶ子と三人で師の中島歌子や田辺花圃の陰口を交わしていました。日記に書かれた言葉がなかなか辛辣なのです。まず中島歌子の評です。

品行(おこない) 日々に乱れて、各(けち) いよいよはなはだしく、歌道に尽くす心は塵ほども見えざるに、弟子の増えなんことをこれ求めて、我れ身を退きてより新来の弟子、二十人にあまりぬ。

一葉の師への悪口はこれにとどまりません。さらにこう書いています。

詠める歌と問へば、去年(こぞ)の稽古納めに歌合したる十中八、九は、手にはとのはず、語格みだれて歌といふべき風情はなし。座に他の大人(うし) なかりしこそよければ、なげかはしきおとろへ方。

すさまじい悪態のつきようです。日頃のうっ憤を一気に吐き出したといってもいいでしょう。田辺花圃への悪口もかなりのものです。勢いあまって矛先は谷中みの子にまで至っています。

おもて清くして裏に汚れを隠す龍子(たつこ) などの憎くいやしきに……
右も濁れり左も濁れり。師も、龍子

も、この人も、いずれも濁りのうちなるを……。

とあたるを幸いといつていいほどに萩の舎の人々を罵倒しています。

この一葉の心の乱れは嫉妬としか考えられませんか。彼女自身は師の歌塾を開いてはどうかという言葉は断っています。が、心の底では萩の舎にあつては誰よりも歌の才があるはずなのに、家が貧しいために塾が開けないのはあまりに理不尽だとかなり怒っていたのは間違いないです。

自分よりも歌の出来栄が劣るのに裕福な同門の女性が歌の師となつて世に出ていく一方で自分は竜泉寺町という塵のような町の中で子供相手に駄菓子を売つて日々かつかつに暮らしているという現実。さらには、そんな強い嫉妬心と抑えきれぬおれの心の動揺に自分で気づけば気づくほど腹立たしさが沸き上がり、日記を書く間に高ぶる感情を一葉はどうすることもできなかつたのでしょうか。

このような生活の上でも精神的な面でも危うい時期に「一葉の危機」と呼びならわしてきた事件、一葉の伝記作家が必ず思い悩む事件が日記に記録されています。すなわち顕真術師・久佐賀義孝との交渉がそれです。このときの一葉の心の内は、日記で見る限りいま述べたとおりですが、彼女の心を悩ませることは他にもあつたかも知れず、彼女の心情を正確

に理解し説明することは不可能に近いでしょう。とりあえず事実の経過を記していくことにします。

二

一八九四(明治二十七年)年二月二十三日、一身の吉凶や諸相場の高低一つとして当らないことはないという天啓顕真術で高名な久佐賀義孝を一葉は訪問します。「もとより身も知らざる人の近づきにとて引き合わせする人もなければ」と、自ら直接出向いていったのです。その動機を日記に「浮世に捨てものの一身を何処(いずこ)の流れにか投げ込むべき。学あり、力あり、金ある人によりて、面白く、をかしく、さわやかに、勇ましく世の荒波を漕ぎ渡らん」と一葉は書いています。

ここで日記帳を改めた一葉は続いてその対面の様子を詳細に記していきます。その分量は半井桃水との「雪の日」を記した日記のほぼ二倍の長さとなつています。

久佐賀義孝は一八六四(元治元)年に熊本城下で生まれで、このとき一葉より八歳年上の三十歳でした。彼の生涯には不明な点が多くあるのですが、漢学や中国語、易経などを修め、中国やインド、アメリカを歴訪したとされています。帰国後、一八八六(明治十九)年に東京本郷真砂町で「顕真術会」を創設しました。

身上鑑定や相場のコンサルタントをしていたらしく、当時、その予言で有名でした。

二月二十三日の昼下がりに「天啓顕真術本部」を訪ねた一葉は「秋月」という偽名を使って久佐賀との対面することに成功します。このときの体面の様子が日記に書かれたのですが、それはまるで小説の一節を読むように書かれています。まず、対面の場所の記述から引用します。

襖(ふすま) 一重のそなたには、その鑑定局なるべし。敷き詰めたる織物の流石に見にくからず、十畳ばかりなるところに、書棚、ちがひ棚、黒棚など、いずこの富家(ものもち)より送られけん、見る目まばゆし。額二つありしが、ひとつは「静心館」とやありし、今一つは何なりけん。床は二幅対の絹地の画(え)なり。床を背にして大きやかなる机をひかえ、火鉢の灰かきならし居(お)るはその人ならん。年は四十ばかりにや、小男にして、声音(こゑ)に静かに盛んなりし。

長い引用になりましたが、少し注目すべきはこの書きぶりです。室内や初対面の久佐賀の描写では「雪の日」の桃水のときの抒情や詠嘆は消えて、はるかに客観的で写実的となっています。作家としての成長と言つていいかも知れません。

突然訪れた一葉に相談の内容は何かと問う久佐賀に、紹介もなしに押しかけた罪は浅くはないと思いますし、気が狂ったのではないかと思いでしようが、これには訳がございまして述べた後、一葉は「我はまことに窮鳥の飛び入るべきふところもなくして、宇宙の間にさまよふ身」です。あなた様の「広き御胸は、（その）内に宿るべき（私の）止まり木」があるのでしょうか。と、まず前置きをしてから、一葉は「我父をうしなひて今年（まで）六年浮世の荒波を漂ひて、昨日は東、今日は西、或は運上の月花（つきはな）にまじはり、或は地下（じげ）の塵芥（ちりあくた）にまじはり、老いたる母、世のことも知らぬ妹を抱きて」と自分の半生と境遇を語り始めます。この言葉の中で「運上の月花」とは萩の舍で上流階級の人々と和歌を交わした暮らし、「地下の塵芥」とは龍泉寺での今の暮らしを指しているのはいまでもありません。

そして、「聞きたまへ、先生」と言つて一葉の話は本題へと入ります。

さらば一身をいけにゑにして、運を一時のあやふきにつけて、相場といふことをなして見ばや。

つまり用件は、この身を犠牲にしても危険を冒して相場をやってみたいということなのでした。さらにこれに続けて

されども、貧者一銭の余裕もなくして、我が力にて我がことを為すに難く、思ひつきたるは先生のもとなり。

と言っています。家には一銭の貯えもありません、どうか助けてください、と士族の娘というプライドも投げ捨てて一葉は言っているのです。

これに対して久佐賀は一葉の生まれた年と誕生日を聞き、それはなかなか運氣の良い年に生まれていると、最初は占い師らしいことを話しています。

その言葉を受けて一葉は久佐賀に語りかけます。

我が一生は破れ破れて、道端に臥す乞食かための末こそは終生の願ひなりけれ。さもあらばあれ、その乞食にいたるまでの道中を作らんとて、朝夕もだゆるなり。つひに破るべき一生を、月に成りてかけ、花に成りて散らばやの願ひ。破れを願ふほかに、やぶれはあるまじや。要するところは、よき死に所の得まほしきぞかし。先生、久佐賀様、よき死に所を教え給はらずや。

久佐賀という男性に対する媚態といつても感じさせる一葉の言葉です。驚くのは二十二歳の彼女はいつしかこのような言葉が発せられる能力を身につけてい

たことです。

さらに言い寄る一葉の巧みな言葉に久佐賀も乗せられて、二人の話題は徐々に人生観・運命論めいたことの応酬移っていきます。それは「我れも人も一見旧識の如し。ものがたり四時（四時間）にわたる」という盛り上がりようでした。

このときの一葉の心のうちは正確にはまったく分かりません。相場の話といつても樋口家の経済状況では投資に手を出す余裕はまったくありません。金まわりの良さそうな久佐賀に無理を承知で借金のお願ひに行つたのか、または自らの運命についての占いを聞きたかつたのか、その真意は日記の記述からはまったく読み取れません。

三

すでに述べたことの繰り返しになりますが、やはり、興味深いのは久佐賀との初対面の様子を記した日記の書きようです。部屋の描写から二人の会話に至るまで一葉は読み手に、その情景が鮮やかに伝わるように書いています。もちろん、この日の日記にはかなりの創作が加えられていると考えられます。そのことを考慮に入れても効果的に挿入される「聞き給へ先生」「先生久佐賀様」という呼びかけといい、切々とした自己の境遇の語りといい、「要するところは、よき死に所の得まほしきぞかし」という切り札の

切り方といい、「語り」は「騙り」に通ずの好例ともなるほどのものです。久佐賀がズルズルと一葉の話に引き込まれていくのも、むべなるかなです。この日の日記の記述は一葉の筆力もあつてまるで映画の一シーンを見ているようです。

その後の久佐賀との経過を記しておく、この後、手紙のやりとりやお互いの訪問が続けられ、やがて、二人の交渉は樋口家への経済的な援助の要求が中心なつていきます。

そうしたことを経て六月九日付けの手紙で久佐賀は一葉に一つの条件を示してきます。

貴女の身上を小生が引き受くるからには貴女の身体は小生にお任せ下さるつもり成るや否や

久佐賀は援助のお金を出す代わりに一葉の身体を要求したのです。これには一葉は憤激してその日の日記に「その一身をここともにゆだね給はらずや」という「厭ふべき文」が来たと記し、それに続けて「あはれ笑ふにたえたる痴（じ）れ者かな」と久佐賀をこき下ろしています。

しかし、一葉はこのように日記に書きながらも、実際には翌年の明治二十八年五月ごろまで久佐賀との交渉を持ち続けています。この間、二人の交渉はかなりきわどいものもあります。

明治二十七年の十二月七日には久佐賀

隠された歴史（85）

満田 正賢

稚子媛「火焰皇子」

〈欽明の子の記述〉

・古事記「石比売」八田王、沼倉倉太玉敷命（*敏達、笠縫王「小石比売」上王「春日日爪臣女・糠子郎女」春日山田郎女、麻呂古王、宗賀倉王「宗賀稲目宿祢大臣女・岐多斯比売」橘豊日命（*用明）、妹石堀（いわくま）王、足取王、豊御氣炊屋比売（*推古、亦麻呂古王、大宅王、伊美賀古王、山代王、妹大伴王、櫻井玄王、麻奴王、橘本若子王、泥杵（ねどの）王「岐多斯比売娘・小兄比売」馬木王、葛城王、間人穴太部王、三枝部穴太部王（亦名須売伊呂杵）、長谷部若雀命

・日本書紀「石姫」箭田珠勝大兄皇子、詠田淳名倉太玉敷尊（*敏達）、笠縫皇女（更名狭田毛皇女）「皇后妹・稚綾姫」石上皇子「皇后妹・日影皇女（？）」「倉皇子「蘇我大臣稲目娘・堅塩媛」大兄皇子、橘豊日尊（*用明）磐隈皇女臘嘴鳥皇子、豊御食炊屋姫（*推古）梶子皇子、大宅皇女、石上部皇子、山背皇子、大伴皇女、桜井皇子、肩野皇女、橘本稚皇子、舍人皇女「堅塩媛同母妹・小姉君」茨城皇子、葛城皇子、泥部穴穂部皇女、泥部穴穂部皇子（更名天香子皇子、一書云更名住迹皇子）、泊瀬部皇子（其一曰茨城皇子、其二曰住迹皇子、其三曰泥部穴穂部皇女、其四曰泥部穴穂部皇子、更名天香子、其五曰泊瀬部皇子）。

しかし、結局のところ久佐賀は一葉の才能ではなく一葉の「女性の身体」にこだわったわけです。まだまだ有名ではないにしろ、すでに数編の小説を世に出している自分が、久佐賀という男性にとつては性的な存在という以外なんの価値も持たないという事実というもの。久佐賀とのかかわりを通じて一葉は自分が置かれた現実、つまり、「女」である自分——性的欲望の対象としての自分——というものを改めて思い知ったのではないか。私にはそう思えます。

結果論ですが久佐賀と関わった経験は作家としての一葉を一回り大きくさせたようです。晩年の作品には女性の性ということへのこだわりが強くなっていきます。

この時期、すなわち一八九四（明治二十七年）年後半に発表された作品が「やみ夜」です。「やみ夜」は「外面如菩薩、内面如夜叉」という主人公お蘭は、それまでの一葉作品が描くことがなかった女性像で、結末に至るまで全編を闇と虚無が覆うというまさに「やみ夜」そのものという作品です。

八歳も年上の男の心を掌にのせて操ったかに見える、この時期の一葉のふるまいを考えるといささか意味深長な作品ですが、「大つごもり」以降の傑作群へとつながっていく重要な作品でもあります。が、その紹介は次回ということとします。

は「月に十五金くらひは毎月の交はりの情を以って手元より補助するは心やすし」。つまり月々十五円で妾となれとまで言ってきたいました。しかも、その手紙からすると一葉は久佐賀に千円（今の二千万円くらい）というとてもない金額を要求しています。この金額から察するに歌塾を開く資金提供を久佐賀にお願いしていたのでしょうか。また、久佐賀がここまで露骨に一葉に身体を要求するという事実から彼女が久佐賀の言葉に怒り狂った後でも彼女が彼に期待をさせるような態度をずつととっていたのではないかと、考えるのが自然でしょう。日記には激しい言葉を書き連ねていたとしても、久佐賀の要求には応じることはないまま、思わせぶりの対応を続けていたに違いありません。

事実、一八九五（明治二十八年）年四月二十五日になつてもまだ一葉は久佐賀に六十円（百二十万円くらい）という多額の借金を申し入れています。久佐賀は翌月の手紙でこれを「とんでもない」拒否します。以後、二人の交渉はほとんど立ち消えます。

繰り返しになりますが、久佐賀に近づいた時の一葉の真意、ねらいがどこにあったかよくわかりません。樋口家の家計が商売にも小説を書いて稼ぐということにも行き詰まっていたため、戸主である一葉は「パトロンを得て小説を書き続ける」と考え至ったかも知れません。

『開皇二十年、倭王姓阿每，字多利思比孤，號阿輩雞彌，遣使詣闕。上令所司訪其風俗。使者言倭王以天為兄，以日為弟，天未明時出聽政，脚踏坐，日出便停理務，云委我弟。高祖曰：「此太無義理。」於是訓令改之。王妻號雞彌，後宮有女六七百人。名太子為利歌彌多弗利。』

最初に、蘇我馬子の出自の考察から始めます。古事記、日本書紀の記す宣化の子と欽明の子の比較（□内は妃の名前）は次に通ります。

〈宣化の子の記述〉

・古事記「橘中津比売」石比売、小石比売、倉若江王「河内若子比売」火穗王、恵波王・日本書紀「橘仲皇女」石姫、小石姫、倉稚綾姫、上殖葉皇子（又名梶子）「大河内

古事記の記す宣化の子のうち、宣化の嫡男と思われる倉若江王が日本書紀では倉稚綾姫という皇女に変えられています。私はこの倉若江王が宣化の造営した那津官家に移って後期九州王朝を建てたと考えています。

また、皇后橘中津比売が生んだ宣化の嫡男は、河内若子比売の子であったはずの恵波王とされています。この恵波王の子孫は後に臣下第一の位である真人の姓（多治比真人）を与えられていますので、宣化の子は欽明の臣下となったという体裁が作られています。すなわち日本書紀によって古事記の記述が恣意的に書き替えられていることは一目瞭然です。

古事記と日本書紀の記述の違いのもう一つの特徴は、欽明の妃のうち、春日日爪臣女・糠子郎女が、その子の宗賀倉王とともに消されていることです。葛城皇子、大伴皇女など、豪族（地域）の名前がつけられた個人名と異なり、宗賀倉王の場合は、宗賀という姓と「倉王」という名前で構成されています。それは、日本書紀が宗賀という姓を除いた「倉皇子」という個人名を記載していることから証明できます。

天皇の皇子が宗賀という姓を名乗ることとは異常です。そのようなことが生じるケースは、皇子を蘇我氏の養子にしたというケースしか考えられません。そしてそれは、蘇我稲目が欽明の子を養子とし

て受け取ったことを意味し、その子は蘇我本宗家を継いだ蘇我馬子であることを指し示しています。そして、日本書紀はその史実(?)を消し去っているのです。日本書紀は、宣化紀に記されていない宣化の娘・日影皇女なる人物をでっちあげ「倉皇子」なる人物を生ませ、春日日爪臣女・糠子郎女と宗賀倉王を消し去ったあとの穴埋めをしているのです。

以上、古事記と日本書紀の比較をすることによって、蘇我馬子の出自が推定出来ました。実はこの蘇我馬子の出自が、隋書倭国伝のいう阿每多利思北孤という名前にぴったり合っているのです。

記紀は、神武以降の天皇名には姓を記していません。しかし、はたして歴代「天皇」は姓を持っていなかったのでしょうか。少なくとも神武以前の天孫族は「天（あま・あめ）」という姓を持っていたことが推定できます。古事記に記された神武の父は天津日高日子波限建鵜草葺不合命（あまつひこひこなぎさたてうがやふきあへずのみこと）であり、さらに一代前は天津日高日子穗穗手見命（あまつひこひこほほでみのみこと）、さらに一代前は天津日子番能邇邇芸命（あまつひこほのにぎのみこと）です。すなわち天孫族は天孫降臨以降、天を名乗っていたと記しています。そして、この「天」がまだ天皇の系譜として使用されていたことは、泊瀬部皇子の更名が天香子（あま

のかこ）であることから推定できます。阿每多利思北孤は「天足彦」、「天垂彦」、「天帶彦」などと表記されていたことが推定できます。蘇我馬子が自らの名を倭国王の名として表現した場合、臣下の名である蘇我ではなく、「天孫族から降下した者」と表現したことは十分に考えられます。

隋書の記述と日本書紀の蘇我馬子の記述とが合致するところを挙げていきます。

まず、「倭王以天為兄，以日為弟，天未明時出聽政」についてです。前述の古事記の系図が正しい、少なくとも蘇我馬子が編纂した「天皇記」にはそう記されていたとすると、蘇我馬子は欽明の子であり推古とは兄妹という関係になります。

当時は年下の兄弟姉妹は男女の別なく弟（おと）と呼ばれていました。「弟媛（おとひめ）」「弟橘媛（倭建命の妻）」などの例があり、欽明紀の中にも「皇后弟、曰稚綾姫皇女」という記述があります。

推古三十二年条には、推古が蘇我馬子を「舅」（夫の父親以外に母親の兄弟も舅と呼びます）と呼んだと記されていますが、母親の堅塩媛は蘇我の稲目の娘であり、この呼び方も正しいのです。まして「蘇我倉王」の存在を消した日本書紀においては「兄」という呼び方は使えず、「舅」という呼び方しかありません。

蘇我馬子の使者は文書を携えており、そこに「倭王以天為兄，以日為弟，天未明時出聽政，跣跣坐，日出便停理務，云委我弟。」と記されていたのではないのでしょうか。この一文をあえて隋朝に提出し

た理由は、蘇我馬子が作り上げた「欽明王朝」において、名目的な天子は「推古」であり、蘇我馬子は宗教社会を支配する「法王」の地位であることを予め説明することの必要性を感じていたからではないでしょうか。

「後宮有女六七百人」についてですが、推古三十二年（六一四）八月に蘇我馬子が病氣になった時には、大臣の為に男女あわせて千人が出家したと記されています。これは隋書の「後宮有女六七百人」という記述に合致するものです。

次に太子である「利歌爾多弗利」について考察します。結論から先に言うと、「利歌爾多弗利」という人物は存在しないと考えます。

隋書倭国伝の「宇多利思比孤，號阿輩雞彌」、「王妻號雞彌」と「名太子為利歌彌多弗利」は対応しています。王は「おきみ」と呼ばれている。王の妻は「きみ」と呼ばれている。いずれも倭国における王と王妃の呼び方を聞いています。王の妻の名前には触れていません。そうであれば太子は個人名を指すのではなく太子の呼び方の一般名を指していると考えの方が自然です。仮に「利歌爾多弗利」が太子の個人名であるとすると、倭王「阿每多利思北孤」の太子ですから「阿每〇〇〇」という名前でなければなりません。

「利歌爾多弗利」を「和歌爾多弗利」

の誤記として、後世の「わかんどほり、わかんどをり」（皇族の血を引く人の意味）に対応する言葉（＊源氏物語・濤標に「わかむとをり」という言葉が出てくる）のことであろうとする解釈があまりある。古来の大和言葉では、原則として「ら行」音は語頭に立たない（万葉仮名では語頭に(r)音が来ない）、すなわち「りかみたふり」という言葉自体が古代大和言葉には存在しないということが、その理由とされています。

この説を裏付けするために、大宰府に保管されていた（中国では現存していない）『翰苑』という史書に記された「和歌爾多弗利」について触れます。

『翰苑』には「利歌爾多弗利」が「和歌爾多弗利」と記載されています。私が大阪府立図書館で、大宰府保管本の写しである『翰苑校釈』（国書刊行会）の「原文影印」と『翰苑』（吉川弘文館）の「図版」を確認したところ、いずれも「王長子号歌爾多弗利華言太子」と記載されており、「歌」の字の右上に薄い墨で「和」という字が追記されていました。また、隋書の「名太子為利歌彌多弗利」という記述を「王長子号歌爾多弗利華言太子」のいう記述に書き換えていることから、翰苑の編者は「（和）歌爾多弗利」を太子の一般名であると理解していることがわかります。これは、隋書の「（和）歌爾多弗利」という記述を中国人が一般名と捉えている例として、参考になると思いま

す。

多利思北孤の使者が本当に「利歌爾多弗利」と言った、または文書に「利歌爾多弗利」と記されていたと主張する場合、古来の大和言葉では、原則として「ら行」音は語頭に立たない（万葉仮名では語頭に(r)音が来ない）、すなわち「りかみたふり」という言葉自体が古代大和言葉には存在しない、という指摘に反論する必要があります。

「利歌爾多弗利」を「和歌爾多弗利」ではないかと推測している方は多くおられますが、なぜそのような間違いが起きたのかについて考察している方はないのではないかと思います。そこで私なりの推測を試みました。

「利」の字と「和」の字を乱暴に毛筆で書くと、読み間違ふ可能性があります。私は、隋の朝廷で多利思北孤の使者との間で『倭国では王はなんと呼ばれているのか』『おおきみと呼ばれております』『王の妻はなんと呼ばれているのか』『きみと呼ばれております』『太子は何という名か』『わかみたふりと申します』という言葉のやり取りがあり、このやり取りを速記したメモを清書する段階で「和歌爾多弗利」と書いてあった速記の「和」の字を「利」の字と読み間違えた、その結果、隋書には「利歌爾多弗利」と記述されるのではないかと推測しています。

俳句

影山 武司

しつとりと月の光に濡れにけり
日の名残映す川面や蘆の花
虫の闇投げ松明の火の粉の尾
どつと落つ炎の柱虫の闇
植多替への土を広ぐる秋日和
和太鼓の音渡りくる刈田かな
繰り言はひとまづ置いて新走り
星月夜チエロの音色のやはらかし
補助輪を外し色なき風を追ふ
神木の森に一札小鳥来る

編集後記

SK生

権である。その行方を今しばらくは見守りたい。▲一方、熊は小生が住む町でも目撃情報が出た。テディ・ベアはかわいらしいが鋭い牙と爪を持ち体長一メートル以上体重百キロをゆうに超える熊が突然現れたら誰でも恐ろしい。そのため行政も駆除の強化に本腰を入れた。やむを得ないこととはいえ多くの熊たちが捕殺されるに違いない。▲人間と熊との共生をどう図るのか。難しい問題だが、宮沢賢治が童話「なめとこ山の熊」で描いた主人公小十郎となめとこ山の熊たちとの共生関係と同じような関係が作れないものだろうか。いうまでもなく賢治が描く童話の世界はファンタジーであり夢物語だ。だが、我々の掲げる美しい夢として将来も持ち続けていたい。野生の熊の恐ろしさは念頭に置きつつであるが。

▲秋もずいぶんと深まりを見せ、近所の茶畑では白色五弁で中央に金色の蕊（しべ）を多数持つ茶の花が咲くようになってきた。「茶の花は雄蕊のおごり日は沈む」（中村草田男）といった光景は地味ではあるが捨てがたい美しさがある。身近で見つけた小さい秋だ。▲この秋の大きなニュースは高市政権の発足と熊の被害の多さだ。今、高市政権に対する期待度の大きさからか高い支持率を誇っている。しかし、高支持率の政権が急速に支持率を低下させた過去の例は多い。裏金問題、物価高騰への対策など多くの課題をかかえた政



五七五を読む ― 十七音の響き方④

新学期さあ始まるよ君の夢

敦

「明日の夢背負い駆け出すランドセル」――二年前のシルバーふれあい川柳展の特選句も夢を応援する句だった。幸多かれ、君の夢に向かってエールを送る。

沈黙の後の言葉を重く聴く

ふみお

ある晩「吉岡、星は出ているか」と聞いた奴がいた。出ていなかった。「そうか。降るような星空というものは、いいものだったなあ」と言った。翌朝確実に死ぬとわかっていている人間は、星が見たいと言う、それだけの言葉に、百万もの思いをこめたのだ。それを甘いと言う奴を俺は許さん。少なくとも、好きになれん――特攻に散った戦友を語る鶴田浩二。テレビドラマ『男たちの旅路』の忘れられない一コマ。

お正月文化交流四世代

修一

子と孫とひ孫と私。四世代が揃う楽しい場を「文化交流」と詠む。さすが川柳人。

都合よく今日を忘れて明日を生き

喜一郎

さだまさしが歌う『まほろば』――遠

い明日しか見えない僕と／足元のぬかるみを気に病む君と／結ぶ手と手の虚ろさに／黙り黙った 別れ道／川の流れば よどむことなく／うたかたの時押し流してゆく／昨日は昨日 明日は明日／再び戻る今日は無い――

今日できることは明日にしてもいい、と思いつつ、今日という一日はもう二度とない、とも。

子の無事を一気に背負い父母の河

ミヤ子

時々熱つばいの子に甘え

千六

「親の心子知らず」と言う。親は万難を排し子を守る。一方、古川柳は「孝行のしたい時分に親はなし」と詠み、諺に「親孝行と火の用心は灰にならぬ前」とも。大いに甘えるべし。

春一番大地も種も目を覚ます

幹夫

春一番に、命無きものも命も春間近と目を覚ます。春の喜びの中で、私たちもやがて見るだろう。雨を知る草にも生きているリズム。

スキップをしたいが平和また遠い

正彦

世界中たった一人にゆれて居り

喜代志

大国の驕り高ぶりトランプも 邦弘
大国がエゴを剥き出し振り廻す 季生
青空に映えるひまわり待つ戦地 幸
生きるだけそれも望めぬ戦下の子

みずえ

爛漫の春に世界が牛耳られ、大国の思い通りがまだ続く。二十一世紀も四半世紀を過ぎようというのに、世界はまだこんなことを繰り返している。

風媒花風を恋して待ち焦がれ

花のよう一人静かに暮らす日々

ふみ女

詩人・吉野 弘の「生命(いのち)は」という詩があります ― 生命は／自分自身だけでは完結できないように／つくられているらしい／花も／めしべとおしべが揃っているだけでは／不十分で／虫や風が訪れて／めしべとおしべを仲立ちする／生命は／その中に欠如を抱き／それを他者から満たしてもらうのだ／世界は多分／他者の総和／しかし／互いに／欠如を満たすなどとは／知りもせず／知らされもせず／ばらまかれている者同士／無関心でいられる間柄／ときに／うとましく思うことさえも許されている間柄／

そのように／世界が構成されているのは／なぜ？／／花が咲いている／すぐ

近くまで／蛇の姿をした他者が／光をまとって飛んできている／／私もあるとき／誰かのための蛇だったろう／／あなたも あるとき／私のための風だったかもしれない ―

風媒花、虫媒花にみる生命の深い意味。

しらじらしい記憶に無いで幕を引き

春美

無い無いと二回も言えばきつとある。わかっていてまだ繰り返す愚。

焦るまいきつとそのうち春は来る

信一

この道のように曲がつて春は来る。孫たちのうがいの音で大笑い 晋一郎
何という至福の時かと改めて思う。大笑いとあるから、孫たちはうがいの音で何かの曲でも演奏していたのだろうか。想像が広がる。